
俺とお前のガンダーラ

澤群 キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とお前のガンダーラ

【NNコード】

N6149Z

【作者名】

澤群 キョウ

【あらすじ】

クリスマスに寄せて。

「ねえねえフーちゃん」

「んー?」

冬樹の部屋にはいつも通り隼がやつてきていて、一人でコタツに足を突っ込んで「ロロロロ、ぐだぐだしている。

「すごい話教えてもらつたんだけど、聞いてくれる?」

「いいぜ」

携帯電話をイジりながら答える冬樹に、隼はいつ話した。

「僕さ、げだつ解脱しようと思つんだ」

「……」

噂のアイドルの流出写真を探している冬樹は答えない。携帯の操作に夢中であるのに加え、隼が口にした言葉にまるで聞き覚えが無かつたからだ。

「だからさあ、フーちゃんもどうかなつて思つて

「なに? リダツ?」

「解脱だよ! げ・だ・つ!」

「なにそれ?」

面倒くさそうに眉間に皺を寄せ、冬樹はようやく小さな画面から目を離した。真剣な、力の入った表情の友人の顔に、फूँと笑う。笑われた隼は、至極マジメな顔でこう答えた。

「もうすぐクリスマスじゃん」

「ああ」

「で、僕達は毎年、彼女も出来なくて、男ばっかりで鍋とかゲームとかじやん

「ああ」

「そういうの、イヤじゃん？」

「まあなあ」

「だから一緒に解脱しようよ」

ポリポリと、冬樹が額を搔く。前髪の生え際の部分に爪の後が小さくついて、赤く染まる。

「ゲダツって何よ？」

「前川先輩に聞いたんだよ。解脱すると、モテなくとも気にならなくなるんだって」

「はあ？」

隼のバイト先の先輩である前川の事は、冬樹も知っていた。スキンヘッドの強面で、一緒に外を歩いているとただでさえ寄つて来ない女性に更に避けられる。

「意味がわかんねえし」

「それさえすれば、モテなくとも、お金がなくても平気になるんだって言つてたよ。前川先輩はもう五年も前に解脱したって言つてた！」

「バカじやねえの？」

冬樹と隼は幼稚園の頃からの付き合いだ。現在十九歳の二人は、いつだって冬樹の狭い四畳半でぐだぐだしている。大学には通つているが、真剣に勉学に打ち込んでいるわけではない。有名大学ではない。まだまだ遊びたいからどこでもいいから潜り込めそうな場所に潜り込んだだけの、将来が悲観される類のダラダラ系若人である。

「バカじやないよ。前川先輩は立派だよ！ 彼女がいなくても全然平気なんだよ。クリスマスなんか知らねえって、バイト先に飾つてあつたツリーをまつぶたつにしたんだから」

「それくらい誰でもできるだろ?」「

「できないよ。フーザさんはできるわけ?」

「そりやお前、やううと思つたらこくらでもできるだろ?」

「じゃあワジングに飾つてあるツリーを折ってきてよ、なんて隼は思ひ。

母の怒りを買いたくない冬樹は、もちろんそんな事はしない。

「解脱つて、ツリーを折るのが目的じゃないんだろ?」

「うん。モテなくとも、お金がなくても、全然辛くないって」

「ヤレなぐても?」

一人が憧れてやまないアレに関してのツツコミ。隼は焦つた。
そんな大事な事を、一番肝心な事を先輩に聞いていなかつた自分の迂闊さに唖然とする。

「……多分?」

「多分じゃねーよ。一番大事なとこだろ、それ
「電話して聞いてみる!」

隼は慌てて電話を取り出し、即座に前川に連絡をした。

「あ、先輩。隼です。はい。あの、聞き忘れた事があつて……」

冬樹は、しうがねえなあ、と言つた顔で再び画像を探し始める。
「はい、あの、解脱の事なんんですけど。……ええ、そうですそれで
す!」

検索の結果に、冬樹は舌打ちをした。案の定偽者だ。お田町でのアイドルとは似ても似つかないブサイクのあられもない姿が画面に出てきて、最終的にそれはそれで、みたいな気分でちよつとだけニヤッとする。

「本当ですかー? はーい、わかりました。やつてみます。はい」

電話を終えると、隼は輝かんばかりの笑顔で冬樹に叫んだ。

「平氣になるんだつて!」

「マジかよ」

「ガンダーラだつて」

「ガンダーラ?」

「とにかく、正座して何も考へるなって言つてた!」

あつたかぬくぬくのコタツから出て、一人はビシッと背を伸ばすと、正座を始めた。

言葉を發せず、動かず、田を閉じて。ひたすら口と向かい合つその時間。

チラチラと舞う煩惱の影の数々が、冬樹の頭上で踊る。それが段々と一つになつていき、隼の心の底へと降りていく。

珍しく何の音もしない四畳半。

心を鎮める一人の心に、妙なる音楽が流れた。

二人が田を開いたのは、ほぼ同時の事だった。

「フーちゃん」

「隼、聞こえたか?」

「うん」

心に流れたのは、とある、古い歌。

「愛の国つてどこのあんの?」

「インデジヤン?」

「……つていうかやっぱ、ラブじやね?」

「うん。やっぱ、ラブだね」

「クリスマスまであと……二日か

顔を見合わせる一人。

心は一つ。

愛と現実の充実を求めて。

今年はもう、ブサイクでも構わない。

毎年、年末の恒例行事となりつつある即席解脱体験四回目で得た
「妥協」を胸に、今年の二人はポジティブに夜の町へと繰り出して
行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6149z/>

俺とお前のガンダーラ

2011年12月20日17時51分発行